

各関係機関・団体長 様

愛媛県病害虫防除所長

病害虫発生予察情報について（送付）

このことについて、8月の予察情報を送付します。

病害虫発生予報（8月）

令和 7 年 7 月 30 日
愛 媛 県

1 気象予報（高松地方气象台）

1 か月予報 7 月 22 日発表（7 月 24 日～8 月 23 日）

〈 1 か月の平均気温・降水量・日照時間 〉

	平均気温（1 か月）	降水量（1 か月）	日照時間（1 か月）
四国地方	低 20 並 30 高 50% 高い見込み	少 30 並 30 多 40% ほぼ平年並の見込み	少 40 並 30 多 30% ほぼ平年並の見込み

〈 予報のポイント 〉

暖かい空気が流れ込みやすいため、向こう 1 か月の気温は高いでしょう。

2 病害虫の発生予想

水 稲

(1) いもち病（早期栽培：穂いもち、普通期栽培：葉いもち）

ア 予報の内容 発生量：（早期）並～やや少 （普通期）やや少～少

イ 予報の根拠

(ア) 7 月中旬の葉いもちの調査では、早期水稲で並、普通期水稲でやや少の発生である。

(イ) 7 月 1～20 日までの BLASTAM による葉いもち感染好適条件出現の判定では、感染好適日が 7 月 1～4 日、8～10 日、16～19 日にかけて認められた（病害虫防除所ホームページ掲載データを参照）。

(ウ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ平年並とされており、発生にやや抑制的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 窒素質肥料（中間追肥、穂肥）の過用は避ける。

(イ) 圃場観察を行い、葉いもちが発生し病勢が進展している場合には早急に薬剤散布を行う。

(ウ) 今後、出穂期となる水稲では、穂いもち対策として出穂期の基幹防除は必ず行う。特に、葉いもちが認められる圃場では注意する。

(2) 紋枯病

ア 予報の内容 発生量：やや多～多

イ 予報の根拠

(ア) 7 月中旬の調査では、早期水稲及び普通期水稲の 31 圃場調査し 2 圃場のみの発生であるが、やや多の発生である。

(イ) 普通期栽培の茎数はやや多い。

(ウ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ平年並とされており、発生にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 普通期栽培では、発生状況により応急防除を実施する（穂ばらみ期の要防除密度となる発病株率 15～20%を目安）。特に、早期栽培では止葉から下位 3 葉の葉鞘に病斑を生じると収量に影響するので、登熟後期の病勢進展が予想される場合には追加防除が必要である。

(イ) 防除に当たっては、株元まで薬剤が到達するように丁寧に行う。

(3) ツマグロヨコバイ

ア 予報の内容 発生量：並～やや多

イ 予報の根拠

(ア) 7 月中旬の調査では、早期水稲で並、普通期水稲でやや多の発生である。

(イ) 予察灯の誘殺状況は、並～やや少である（病害虫防除所ホームページ掲載データを参照）。

(ウ) 気象予報では、気温は高いとされており、発生に助長的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 早期・短期栽培と普通期栽培が混在している地域やイネ科雑草が優占する休耕田の近接圃場では、収穫や除草により周辺圃場の密度が急増する事例が見られるので注意する。

(イ) 本虫に登録のある箱施用剤を処理している普通期水稻では応急防除の必要はないが、箱施用剤にプリンス剤を使用している地域や箱施用剤を処理していない圃場では、発生（要防除密度：出穂期の成虫密度 30 頭/株）に応じて応急防除を実施する。

(4) セジロウンカ

ア 予報の内容 発生量：やや多

イ 予報の根拠

(ア) 7月中旬の調査では、早期水稻、普通期水稻ともに発生は並である。

(イ) 予察灯での誘殺状況は、並である（病害虫防除所ホームページ掲載データを参照）。

(ウ) 気象予報では、気温は高いとされており、発生に助長的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 普通期水稻で箱施用剤を処理していない圃場では発生に注意する。

(5) トビイロウンカ

平成3年7月30日付け令和3年度病害虫防除技術情報（第7号）参照

(6) イチモンジセセリ（イネツトムシ：第2世代）

ア 予報の内容 発生量：並

イ 予報の根拠

(ア) 7月中旬の調査（普通期水稻・第1世代）では、ツト数はやや少である。

(イ) 気象予報では、気温は高いとされており、発生に助長的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 本虫に効果のある箱施用剤の未実施圃場や葉色の濃い圃場で被害が多くなるため、肥培管理に注意する。

(イ) 圃場観察を行い、発生が多い場合には若齢幼虫期（ツトの発生初期：8月上旬中旬）に防除する。

(7) フタオビコヤガ（イネアオムシ）

ア 予報の内容 発生量：少

イ 予報の根拠

(ア) 7月中旬の調査（普通期水稻）では、発生は確認していない。

(イ) 予察灯における誘殺状況は、久万高原町の予察灯で平年に比べ多いが、その他の予察灯では少なく推移している（防除所ホームページ掲載データを参照）。

(ウ) 気象予報では、気温は高いとされており、発生に抑制的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 幼虫の発生ピークは8月上旬と推定され、密度が急増する場合がありますので注意する。

(イ) 葉色の濃い圃場で被害が多くなるので注意する。

(8) コブノメイガ

ア 予報の内容 発生量：（普通期）やや少～並

イ 予報の根拠

(ア) 7月中旬の被害葉調査では、早期水稻、普通期水稻ともにやや少の発生である。

(イ) 気象予報では、気温は高いとされており、発生に助長的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 葉色の濃い圃場で被害が増加するため発生に注意する。

(イ) 防除適期は、粒剤では成虫発生最盛期であり、粉剤・液剤では成虫発生最盛期の7～10日後（若齢幼虫期）となる。

(9) 斑点米カメムシ類（早期・普通期水稻）

平成3年7月30日付け令和3年度病害虫発生予察注意報（第1号）参照

かんきつ

(1) かいよう病

ア 予報の内容 発生量：並

イ 予報の根拠

(ア) 7月中旬の調査では、葉、果実ともに発生は並である。

(イ) 気象予報では、降水量はほぼ平年並とされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 発病果や発病葉は早期に除去し、園地内の病原菌密度の低下を図る。

(イ) 強風により付傷すると発病が助長されるため、防風垣や防風ネットを整備する。

(ウ) 夏秋梢では、ミカンハモグリガの食害痕が病原細菌の侵入箇所となるので防除を徹底する。

- (エ) ‘愛媛果試第 28 号’ ‘甘平’、‘はれひめ’等は、本病に罹病性なので発病に注意する。
(オ) 既に発生が認められる園地では、早めの薬剤散布に努める。

(2) 黒点病

ア 予報の内容 発生量：並

イ 予報の根拠

(ア) 7月中旬の調査では、発生は並である。

(イ) 気象予報では、降水量はほぼ平年並とされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 枯枝を早期に除去し、処分する。

(イ) マンゼブ剤およびマンネブ剤の散布間隔は、累積降水量が 200～250mm（または散布後 30 日）に達した時である。ただし、本病に対して罹病性が高い品種の‘せとか’、‘河内晩柑’、‘清見’等の散布間隔は、累積降水量約 180mm（または散布後 25 日）とする。

(3) ミカンハダニ

ア 予報の内容 発生量：並

イ 予報の根拠

(ア) 7月中旬の調査では、発生は並である。

(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ平年並とされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 園地内の早期多発樹で、1 葉当たりの雌成虫が平均 2～3 頭に達した時期が防除の目安となる。

(イ) 薬剤は掛けむらのないように丁寧に散布する。

(4) ミカンサビダニ

ア 予報の内容 発生量：やや多

イ 予報の根拠

(ア) 7月中旬の調査では、発生は確認していない。

(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ平年並とされており、発生にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 被害果はその後の発生源となるため、早期に除去・処分する。

(イ) 被害は園地内で局地的に発生しはじめるため、園地観察をこまめに行い発生後は早期防除に努める。

(5) ヤノネカイガラムシ（第 2 世代）

ア 予報の内容 発生時期：並

イ 予報の根拠

(ア) 八幡浜市で 7 月 18 日に、松山市伊台で 7 月 27 日に、第 2 世代幼虫の初発が確認され、平年並の発生時期である。

ウ 防除上の注意

(ア) 防除は、第 2 世代幼虫初発生から 30 日後を目安とする。

(イ) 幼虫初発日は病害虫防除所ホームページ掲載データを参照。

か き

(1) 炭疽病

ア 予報の内容 発生量：並

イ 予報の根拠

(ア) 7月中旬の調査では、並の発生である。

(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ平年並とされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 園地内をこまめに観察し、発病枝・発病果は早期に除去し、園外に持ち出す。

(イ) 定期防除に努める。

(2) うどんこ病

ア 予報の内容 発生量：やや多

イ 予報の根拠

(ア) 7月中旬の調査では、発病度の高い園地が認められており、発生は多である。

(イ) 気象予報では、気温は高く、降水量はほぼ平年並とされており、発生にやや抑制的である。

ウ 防除上の注意

- (ア) 通風、採光を図るとともに、園地内の排水を良くする。
- (イ) 防除は、葉裏から丁寧に行う。

(3) フジコナカイガラムシ (第2世代)

- ア 予報の内容 発生量：多
- イ 予報の根拠
 - (ア) 7月中旬の調査では、発生はやや多である。
 - (イ) 気象予報では、気温は高いとされており、発生に助長的である。
- ウ 防除上の注意
 - (ア) 防除は、若齢幼虫の発生状況に応じて行い、発生が多い園ではその3週間後に第2回目を行う。

キウイフルーツ

- (1) かいよう病
 - ア 予報の内容 発生注意
 - イ 予報の根拠
 - (ア) 4～5月にかけての強風雨により、葉の発生は昨年よりやや多い傾向である。
 - ウ 防除上の注意
 - (ア) 盛夏時に新たな病徴が認められない場合でも樹体内には病原菌は生存しているため、今後も園地見回りによる発生確認と被害部の除去を徹底する。なお、伐採基準は、平成31年3月改訂の「キウイフルーツかいよう病 Psa3 型の防除方針」に基づき発病程度に応じて適切に対応する。
 - (イ) 高温条件下では、果実のしぼみや枝枯症状が発生する場合がある。
 - (ウ) 台風の接近等、強風雨による病原菌の拡散防止や樹体の損傷を抑えるため園地の防風対策を行う。

果樹共通 (なし、かき、キウイフルーツ、かんきつ、もも)

- (1) カメムシ類
 - ア 予報の内容 発生量：少～やや少
 - イ 予報の根拠
 - (ア) 集合フェロモントラップでの7月の誘殺状況は、全5地点で平年より少ない。また予察灯での7月の誘殺状況も全地点で少なく推移している(病害虫防除所ホームページ掲載データを参照)。
 - (イ) 県内11地点(7月中旬調査)のヒノキ球果の結実量はやや多い(表)。
 - (ウ) ヒノキ球果での寄生数(10回掬取り調査)の結果、チャバネアオカメムシの平均捕獲虫数は0.45頭/地点と平年(1.21頭)に比べ少ない(表)。
 - (エ) 林野からの離脱の目安となるヒノキ球果の口針鞘数は0.16個/球果であり、平年(0.69個/球果)よりも少なく、新成虫がヒノキを離脱する25個/球果に達している地点はない(表)。
 - (オ) 気象予報では、気温は高いとされており、発生に助長的である。
 - ウ 防除上の注意
 - (ア) 8月以降は新成虫の発生時期となるため、園内への飛来に注意し発生初期の防除に努める。本年はヒノキ球果がやや多い傾向であるため、新成虫の果樹園地への飛来時期が遅くなる場合がある。
 - (イ) 秋季の台風等の影響により風雨後に果樹園に飛来する可能性があるので注意する。

果樹カメムシ ヒノキ球果調査(2021年7月調査)

調査地	ヒノキ球果 結実量	10回すくい取り虫数						合計	口針鞘数/ ヒノキ1球果
		チャバネアオ		ツヤアオ		クサギ			
		成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫		
新居浜市船木	多	0	0	0	0	0	0	0	0
西条市丹原町田滝	やや多	1	0	0	0	0	0	1	0
今治市大西町脇	やや多	0	0	0	0	0	0	0	0.1
松山市立岩	やや多	1	0	0	0	0	0	1	0
松山市菅沢	中	0	0	0	0	0	0	0	0
松山市久谷	中	0	0	0	0	0	0	0	0.2
久万高原町明神	やや少	1	0	0	0	0	0	1	0
内子町五十崎	やや多	0	0	0	0	0	0	0	0.35
西予市城川町土居	やや多	0	0	0	0	0	0	0	0.10
西予市宇和町西山田	やや多	0	0	0	0	0	0	0	0
愛南町城辺緑	やや多	2	0	0	0	0	0	2	1.00
平均(R3)		0.45	0	0	0	0	0	0.45	0.16
平年値(H23~R2)		1.06	0.03	0.1	0	0	0.108	1.21	0.69
今年の順位(H23~R2)		8	8	8	6	7	7	8	8

野菜

(1) 黄化えそ病(夏秋きゅうり)

ア 予報の内容 発生量：並～やや多

イ 予報の根拠

(ア) 7月中旬の調査では、発生は並である。

(イ) 媒介虫のミナミキイロアザミウマの発生は並である。

(ウ) 気象予報では、気温は高いとされており、ミナミキイロアザミウマの発生に助長的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 発病株は、直ちに抜き取り適正に処分する。

(イ) 媒介虫の卵・蛹には薬剤の効果が劣るので、発生圃場では5～7日間隔で2～3回防除する。

(ウ) 媒介虫は、雑草等でも増殖するので圃場内外の除草を徹底する。

(2) 褐斑病(夏秋きゅうり)

ア 予報の内容 発生量：やや少

イ 予報の根拠

(ア) 7月中旬の調査では、やや少の発生である。

(イ) 気象予報では、降水量はほぼ平年並とされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 草勢低下、窒素肥料の過多は発病を助長するので、適正な肥培管理に努める。

(イ) 老化葉や発病葉は早めに除去する。

(ウ) 発病初期の防除に重点を置き、葉裏まで丁寧に散布する。

(3) 炭疽病(夏秋きゅうり)

ア 予報の内容 発生量：やや少

イ 予報の根拠

(ア) 7月中旬の調査では、やや少の発生である。

(イ) 気象予報では、降水量はほぼ平年並とされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 草勢低下、窒素肥料の過多は発病を助長するので、適正な肥培管理に努める。

(イ) 老化葉や発病葉は早めに除去する。

(ウ) 発病初期の防除に重点を置き、葉裏まで丁寧に散布する。

- (4) 葉かび病 (夏秋トマト)
- ア 予報の内容 発生量：やや少～並
 - イ 予報の根拠
 - (ア) 7月中旬の調査では、並の発生である。
 - (イ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ平年並とされており、発生にやや抑制的である。
 - ウ 防除上の注意
 - (ア) 草勢が衰えると発病しやすくなるので、肥切れしないように適正な肥培管理に努める。
 - (イ) 定期的な薬剤防除を行い、薬液が葉裏までかかるよう丁寧に散布する。
- (5) 炭疽病 (いちご育苗床)
- ア 予報の内容 発生量：やや多
 - イ 予報の根拠
 - (ア) 7月中旬の調査では、並の発生である。
 - (イ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ平年並とされており、発生にやや助長的である。
 - ウ 防除上の注意
 - (ア) ランナー、葉柄、小葉に病斑が見られる株は、伝染源となるので直ちに除去する。特に小葉は本病に対する感受性が高く発病しやすいので、この部位を中心に発病把握に努める。
 - (イ) 降雨によって胞子が飛散するので、降雨前後の防除を徹底する。
 - (ウ) 底面・株元給水は雨よけ栽培との併用で本病の防除効果が高い。なお、頭上灌水を行っている圃場では夕方遅い時期の散水は避ける。
 - (エ) 定期的な薬剤防除を行う。
- (6) アブラムシ類 (さといも、夏秋野菜全般)
- ア 予報の内容 発生量：やや多～多
 - イ 予報の根拠
 - (ア) 7月中旬の調査では、夏秋きゅうりで多、イチゴ (育苗床) でやや多、夏秋トマト・さといもで並、夏秋なすでやや少の発生である。
 - (イ) 黄色粘着トラップによる有翅アブラムシの誘殺状況は、3地点中1地点で多で推移している (病害虫防除所ホームページ掲載データを参照)。
 - (ウ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ平年並とされており、発生にやや助長的である。
 - ウ 防除上の注意
 - (ア) 圃場観察を行い早期発見に努め、発生が見られたら早めに防除する。
- (7) ハダニ類 (いちご育苗床、さといも、夏秋野菜全般)
- ア 予報の内容 発生量：やや多～多
 - イ 予報の根拠
 - (ア) 7月中旬の調査では、イチゴ育苗床でやや多、夏秋なす・さといもで並の発生である。
 - (イ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ平年並とされており、発生にやや助長的である。
 - ウ 防除上の注意
 - (ア) 圃場観察を行い早期発見に努め、発生が見られたら早めに防除する。
 - (イ) 薬剤感受性の低下を防止するため、同一系統の薬剤の連用は避け、ローテーション使用とする。
 - (ウ) 多発圃場では、散布間隔を詰めて密度抑制に努める。
 - (エ) 圃場周辺の除草に努める。
- (8) コナジラミ類 (いちご育苗床、夏秋野菜全般)
- ア 予報の内容 発生量：やや多～多
 - イ 予報の根拠
 - (ア) 7月中旬の調査では、イチゴ育苗床でやや多、夏秋トマト・夏秋なす・夏秋きゅうりで並の発生である。
 - (イ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ平年並とされており、発生にやや助長的である。
 - ウ 防除上の注意
 - (ア) 薬液が葉裏までかかるように定期的な薬剤散布を行う。
 - (イ) 本虫は、多くの植物に寄生するため圃場内外の除草を徹底する。
 - (ウ) コナジラミ類はトマト・きゅうりでウイルスを媒介するので注意する。

- (9) ハスモンヨトウ (大豆、さといも、夏秋野菜全般)
- ア 予報の内容 発生量：やや多～多
- イ 予報の根拠
- (ア) フェロモントラップによる誘殺状況は、7月前半からやや増加傾向を示す地点が7地点中5地点でみられ、現在、並～やや多である(病害虫防除所ホームページ掲載データを参照)。
- (イ) 7月中旬の調査では、サトイモでの食害面積率はやや多である。
- (ウ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ平年並とされており、発生にはやや助長的である。
- ウ 防除上の注意
- (ア) 圃場観察を行い幼虫の早期発見(大豆では白変葉の発生)に努め、若齢期に防除する。
- (10) オオタバコガ (夏秋野菜全般)
- ア 予報の内容 発生量：並～やや多
- イ 予報の根拠
- (ア) フェロモントラップによる誘殺状況は、並～やや少である。(病害虫防除所ホームページ掲載データを参照)。
- (イ) 7月中旬の調査では、夏秋トマトにおけるタバコガ類の発生は並である。
- (ウ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ平年並とされており、発生にやや助長的である。
- ウ 防除上の注意
- (ア) 圃場観察を行い幼虫の早期発見に努め、若齢期に防除する。
- (11) シロイチモジヨトウ (ねぎ、夏秋野菜全般)
- ア 予報の内容 発生量：やや多
- イ 予報の根拠
- (ア) フェロモントラップによる誘殺状況は、7月以降減少傾向であるが、並～やや多で推移している(病害虫防除所ホームページ掲載データを参照)。
- (イ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ平年並とされており、発生にやや助長的である。
- ウ 防除上の注意
- (ア) 圃場観察を行い幼虫の早期発見に努め、若齢期に防除する。

【病害虫発生予察情報】

愛媛県病害虫防除所ホームページでご覧になれます。

ホーム > 仕事・産業・観光 > 農業 > 鳥獣害・病害虫対策 > 愛媛県病害虫防除所

ホームページアドレスは

<http://www.pref.ehime.jp/h35118/2406/byocyubojo/index.html>

【農薬使用時の注意】

- ◎農薬の選定にあたっては、農薬取締法に基づき登録された農薬から選定しましょう。
- ◎農作物の安全性を確保するため、農薬の使用にあたっては、適用作物、使用回数、使用時期、使用濃度、使用量、使用方法等の使用基準を遵守しましょう。
- ◎病害虫等の発生を的確に把握し、適時適切な経済防除に努め、農薬や労力等の低投入を図るとともに、低毒性農薬を使用しましょう。
- ◎農薬による防除のみに頼らず、耕種的防除法、物理的防除法及び天敵導入等を積極的に取り入れた総合防除を推進しましょう。
- ◎同一薬剤の連用は耐性菌、抵抗性害虫の出現や助長をまねくので、農薬のローテーション使用を心掛けましょう。
- ◎農薬を使用する際、農薬のラベルに記載された登録内容、使用上の注意事項等を遵守し、農薬の散布にあたっては、農薬の種類に応じた保護具を必ず装着しましょう。